

## 原稿 189

「隣る人」(監督/刀川和也)は、チラシの文言をそのまま用いるなら、「親と暮らせない子どもたちと、隣り合う保育士たち。そして、子どもとふたたび暮らすことを願う親。ある児童養護施設の日常を追う8年間のドキュメンタリー」である。

本作には、ナレーションや字幕による説明がない。観客は、被写体になっている大人や子どもたちから発せられる言葉や表情、行動から事態を読み取り、解釈し、そのうえで自分流の物語を構築することになる。

「光の子どもの家」という名の小規模の施設である。保育士が何人かの子どもを受け持って寝食をともにし、しかも「タケハナ家」、「サトウ家」と呼び合っているところを見ると、施設という場ではあるが、里親型のグループホーム、いわゆる小規模住居型児童養育事業(ファミリーホーム)に近い。ちなみにこの事業は、平成21年度に創設された制度であり、養育者の住居で児童5~6人の養育を行うものである。

被写体の中心は、10歳の誕生日を迎えるムツミと保育士のマリコ、ムツミの実母である。実母の代わりにおばあちゃんがムツミを育てていたのだが、「あれさえなければねえ」と言って手放すことになる。「あれ」とは具体的に何のことかわからない。おそらく、おばあちゃんでは制御できない行動や言動があったのだと思われる。

実母も施設を訪れるが、ムツミは微妙に距離を取る。一時帰宅に際しても泊まるとは言わない。過去、この母子の間に何があったのだろうか。実母が施設からの帰宅途中パニックを起こして注射を何本か打ってもらったということや、ムツミが実家から施設に戻る車で、ヤケドの跡を見せたりするエピソードから推察するほかはない。

そして、ムツミに隣<sup>とな</sup>る人として寄り添うマリコは、「二十四の瞳」の大石先生そのものである。ムツミのためにひたすら涙を流し、どんなむっちゃんでも大好きだし、ずっと一緒にいたい、と包容性に満ちた言葉を贈るのである。これに対して小さく頷くムツミ。

虐待、疾病や障害、家庭崩壊、災害等によって適切な養育環境が得られない子どもたちがいる。これらの子どもたちにとって必要なことは人から愛されているという実感、あるいは包みこまれているという安心感である。このことが時代の課題になっているからこそ本作が生まれたのであり、「隣る人」実践の静かなる伝染は必然である。

(2012年公開作品)

「隣る人」

—児童養護施設における自身の私的生活時間を重ねる思想実践

